

## 国税庁長官賞

未来を繋ぐ

船橋市立行田中学校

第二学年

富田

梨花

私は、小学校六年生の頃から県の少年少女

オーケストラに所属しています。ここに所属している団員は、全員十歳から二十歳までの千葉県内在住または、通学者の子供達だけで結成しています。このオーケストラは、「良い音で、良い演奏」をモットーにしており、団員は、自分の楽器を持っていなくても無償で良い楽器を借りて練習に参加できます。そして、プロの先生の指導の中とても広い会場で練習をするという素晴らしい環境の下で活動しています。

教えに来てくださるプロの先生の中には、たくさんの卒団生がいます。このように、県のオーケストラで育ち、プロになって私達を教えに戻ってきてくれている方がいるのです。さらに、世界で活躍して色々なところで素敵な音色を届けている方もいれば、私の小学校

の頃の部活の顧問のように、教育の場で音楽を広めている卒団生もいます。

そんな県のオーケストラに入って、私が税金を深く知る機会が二つありました。一つ目は、練習中の音楽監督の言葉です。「あなたたちは、県の税金をたくさん使って活動しています。ですから、挨拶はもちろん身だしなみもしっかりしてください。」私はこの言葉で、練習会場費、楽器購入費、講師の先生、演奏会でお世話になる一流のソリストや、世界的に有名な指揮者の先生への謝礼などが全て税金で賄われていることに気がつきました。二つ目は、プロの指揮者の先生から受けた言葉です。「これが未来を担うオーケストラメンバ―です。」この言葉は、誰が聞いても未来を背負っていく子供達への活躍を願っている明るい言葉だと思います。しかし、私の胸の中には嬉しさだけではなく、不安を覚えました。な

ぜなら私は、たくさんの人からの税金に対し、恩返しをしたり、未来で活躍できるのでしようか。

この二つの言葉から、今まで払う義務だと認識していた税金について考え直してみました。今学生の私は、税金を払うよりも、たくさんの人の税金で私の学びが支えられています。では、私は今後どのように恩返しをしたら良いのでしょうか。まず、税金で学ばせてもらった知識、経験を活かし、世界で活躍したり、多くの卒団生のように未来の子供達へ音楽の楽しさを伝えること。また、税金を支払い、未来の子供達の学びの場を作っていくことで日本を豊かにすること。この二つではないのでしょうか。

つまり、税金とは「未来の日本をつくるバトン」だと考えます。税金は、一人一人の夢や希望を叶える手段であり、叶った夢や希望はさらに、人や社会を育てます。一人の納税では変えることが難しい物も、国民一人ずつの納税を集めれば変えることができるでしょう。そこで私は、今学べることをたくさん吸収し、この社会の一員として税金というバトンを引き継いでいきます。